

【今年度の結果と取組みについて】

〇●国語●〇

(領域ごと)

①言葉の特徴や使い方に関する事項	やや課題が残る結果であった
②情報の扱い方に関する事項	概ね良好な結果であった
③我が国の言語文化に関する事項	課題が残る結果であった
④話すこと・聞くこと	概ね良好な結果であった
③書くこと	概ね良好な結果であった
④読むこと	やや課題が残る結果であった

(問題形式)

①選択式	概ね良好な結果であった
②短答式	やや課題が残る結果であった
③記述式	やや課題が残る結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・もともと正答率の高かった設問…1 二「情報と情報との関係について理解しているかをみる問題」
- ・もともと正答率の低かった設問…2 二「観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考えることができるかをみる問題」
- ・もともと無解答率の高かった設問など…4 三「文章の構成や展開、表現の効果について、根拠を明確にして考えることができるかをみる問題」
- ・もともと無解答率の低かった設問など…1 一、二、三「話の内容を捉え、知りたい情報に合わせて効果的に質問できるかをみる問題」

分析

情報の扱い方に関する問題や話の内容を捉え、知りたい情報に合わせて効果的に質問する問題については、全国平均と比較して、正答率が高かった。問題が会話文であるため、比較的捉えやすく感じたようである。また、これまでに取組んだことのある内容であったため、前向きに解答できたのだと考える。

観点を明確にして文章を比較し、表現の効果について考える問題については、全国平均と比較して正答率が低い。考えられる要因として、朝読書の時間は設定しているが読書習慣が定着しておらず、「読書」の話題であったため、扱いにくい問題として捉えてしまったのではないかと考える。また、解く工程が多い問題であり、一つひとつの工程を複雑に感じ諦めてしまい、条件を全て満たすことができなかったと思われる。

教科書以外の長文になれていないため、様々な種類の文章を通して、表現力・語彙力・言い回しに触れる機会を増やしていく必要がある。また、意見交流で自分にはない表現の仕方を知り、生徒が自信をもって表現し、生徒の「できた!」を感じられる取組を進め、個々の学力の向上につなげていきたい。

(領域ごと)

- | | |
|---------|---------------|
| ①数と式 | やや課題が残る結果であった |
| ②図形 | 概ね良好な結果であった |
| ③関数 | やや課題が残る結果であった |
| ④データの活用 | 課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|---------------|
| ①選択式 | やや課題が残る結果であった |
| ②短答式 | やや課題が残る結果であった |
| ③記述式 | やや課題が残る結果であった |

(無解答率) やや課題が残る結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・もともと正答率の高かった設問…9(1)「ある事柄が成り立つことを構想に基づいて証明する問題」
- ・もともと正答率の低かった設問…7(1)「四分位範囲の意味を問う問題」
- ・もともと無解答率の高かった設問…7(2)「数学的な表現を用いて説明する問題」
- ・もともと無解答率の低かった設問など…1「自然数の意味を問う問題」

分析

平行線や角の性質を基に図形を考察する問題においては、全国平均に対して正答率が高かった。説明文が比較的長く、図がいくつもあり、解きにくさを感じる問題ではあるが、意欲的に取組んだ様子がうかがえる。

「四分位範囲」の意味を理解しているかをみる問題に関しては、全国平均に対し、正答率が低くなっていた。漢字が並ぶことで「わからない」と思ったり、表に対する苦手意識があるため、問題文を全て読まずに解答しているのではないかと考える。

日頃から、表や文章量の多い内容は最後まで読み切らずに飛ばしてしまう状況があり、課題である。苦手意識もありすぐに諦めてしまう傾向があるため、問題文を図式化して丁寧に読み解いていくことを普段の授業から行う必要がある。また、授業の中では解けている問題も、問われ方が変わると難しく感じている。似たような問題に挑戦させて、問題を「読み取る」ことに重点をおいて授業を進めていきたい。

(領域ごと)

- | | |
|-------|-------------|
| ①聞くこと | 課題が残る結果であった |
| ②読むこと | 課題が残る結果であった |
| ③書くこと | 課題が残る結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-------------|
| ①選択式 | 課題が残る結果であった |
| ②短答式 | 課題が残る結果であった |
| ③記述式 | 課題が残る結果であった |

(無解答率) 概ね良好な結果であった

(その他)

学校の特徴的なことについて記入

- ・もっとも正答率の高かった設問…7(2)「日常的な話題について、短い文章の概要」
- ・もっとも正答率の低かった設問…10「日常的な話題について、事実や自分の考えなどまとめる問題」
- ・もっとも無解答率の高かった設問…8(2)「社会的な話題について、考えとその理由を書く問題」
- ・もっとも無解答率の低かった設問など…1(1)、5(1)、6、7(1)「文と文との関係を正確に読み取る問題」など

分析

短い文章の概要を捉える問題においては、全国平均と比較して正答率が高かった。この問題は、選択式ではあるものの、読み取らなければならない内容が比較的長いにも関わらず、本文と照らしあわせて根気よく答えを導いた結果だと考える。

自分の意見や考えを求められる問題に関して、全国平均と比べ、正答率が低い。自分の考えを何から書きはじめたらよいのか迷うことが多く、自信のもてないものについては取り組みにくさを強く感じている。また、自分の考えがあったとしても、その単語が分からず表現できなかったり、知っている単語を用いて言い換えて表現したりすることが難しいと考えている様子がある。

表やグラフがあるような問題を諦めてしまう傾向があるため、授業では、グラフなどがともなった読解の課題に触れる機会を増やし、一つずつ丁寧に示していくなどの工夫が必要である。長文に関しては、英語に限らず様々な状況を表現した文章に多く触れていく必要があり、知識や情報を多く自分の物にしていく授業を展開していきたい。また、自分の考えを簡単な英語を用いて表現できることを目標に、授業での学習事項を自分のこととして表現していく機会や、それらを生徒同士で交流して多くの価値観に触れる場面に更に設定していきたい。

「話すこと」調査では、全国平均と比べて全体的に正答率が低い。知っている単語を使って何とかこたえようとする様子がみられるが質問に正対した解答になっていない。また、正解を意識しすぎて、答えることをためらう傾向があるため、短文表現の反復練習をつみ重ねて、自分の思いを表現できるところまでスモールステップで進めていきたい。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

年度ごとの増減はあるが、全体として正答率はわずかながら上昇している。問題文が長いものや、条件が複数になるものについては、諦めてしまう傾向にあり、無解答率が全国平均と比べ、高くなったものと考ええる。また学習習慣の定着が難しく、課題が見られる。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

昨年度に引き続き、わずかではあるが高位層は増加している。また、低位層やエンパワー層は減少した。今年度は前年度以上にペア学習やグループ学習を多く授業に取り入れ、校区で取り組む「協同的な学び」を進めることで、生徒が安心して授業に向かえる姿勢を保つことができ、他の生徒の様々な意見から学びが深まっていったと考えられる。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

① 授業研究の推進

中学校区(2小1中)で、「聴き合い学び合う授業づくり」に取り組み、授業づくりの視点を共有している。また、年3回実施している授業づくり研究集会の事前練り上げや事後協議、外部講師による講評・講演を通して授業力向上を図っている。生徒同士が対話することにより、思考が活性化するとともに、多様な考え方を知ること、自身の考えが深まるため、授業ではペア学習やグループ学習を取り入れている。

校内では、お互いの授業を参観する機会を設定したり、学年ごとに録画した授業の様子から、授業改善につなげている。

② 学習習慣定着のとりくみ

学習の手引き(各教科の学習および評価方法)と学習(自主勉強)ノートを配布。学習(自主勉強)ノートは、学習した内容を学年ごとに評価し、自主的に学習に臨む姿勢を育むものとする。朝読書、昼学習会、テスト期間の放課後学習会、長期休業中の学習会を開催し、学習の支援や習慣の定着を図っている。テスト2週間前には、テスト範囲と提出物の一覧を配付し、生徒の計画的な学習を支援するとともに、豊川中学校 メールマガジンで配信し、保護者の方への協力もお願いしている。計画的に継続して学習をすすめられるよう、学年の状況に応じて、提出物確認表やテスト計画・実行状況表などを作成、学習プリントの配付などを行っている。

③ 授業における支援体制の確立

国語・数学・英語を中心として、習熟度別授業、少人数授業、チームティーチング・スクールサポーターの活用など、丁寧に生徒の様子を確認し、支援できる体制づくりを進めている。

④ テスト・アンケートの分析

生徒の学習状況を把握するため、第1・2学年の年度初めに、国語・数学の確認テストを実施している。また、各授業者は1・2学期末において実施する授業アンケートから、生徒の授業の進捗や理解度を確認している。それらをもとに、自身の授業を振り返り、生徒が主体的に学習に取り組めるよう、次学期以降の授業づくりに生かしていく。

全国学力・学習状況調査については、全教職員で課題が何であるかを確認し、課題克服のために必要な手立てについて共有し、授業力向上につなげる。